

令和 6年 8月 9日

令和5年度 特別の教育課程の実施状況等について

滋賀県		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
米原市立坂田小学校	米原市教育委員会	公立

1. 学校における特別の教育課程の編成の方針等に関する情報

学 校 名	特別の教育課程の編成の方針等の 公表 URL
米原市立坂田小学校	https://sakata-e-maibara.edumap.jp/page_20220423014046

2. 学校における自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学 校 名	自己評価結果の公表 URL	学校関係者評価結果の公表 URL
米原市立 坂田小学校	https://sakata-e-maibara.edumap.jp/page_20220423014046	https://sakata-e-maibara.edumap.jp/page_20220423014046

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- ・計画通り実施できている
- ・一部、計画通り実施できていない
- ・ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

※(1)で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- ・実施している
- ・実施していない

<特記事項>

3. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している目標との関係

本校は、「自らの手で 自分たちの 生活を・学校を・地域をつくる子の育成～みんなで築く『さかたプライド』～」を学校教育目標に、知・徳・体、調和のとれた児童の育成を目指している。米原市にあってJR琵琶湖線の駅近くに立地する本校区は、商業施設や新興住宅地の開発が続き、教育熱心な旧来の地域を含め活気がある地域である。児童も明るく活発で、学習にも意欲的である。しかし、一方で指示されたことにはまじめに取り組めるが、自信をもって表現したり、積極的に学びを深めたりすることはやや苦手である。また、互いの良さを認め合い切磋琢磨し合うという姿に物足りなさを感じるのが現状である。学力的な部分においては、全国学力学習状況調査や4年生で実施している学力調査の結果から課題がみられるものの、児童それぞれがもつ良さを出し合う学習の場をより多く設け、児童の自信や学ぶ意欲を高めていくことに取り組んできた成果が少しずつ表れていると感じている。また、今年度の校内研究では、「さかたプライドを高める」特別活動の在り方を研究しており、児童の意欲や主体性を大切にしたい取組を推進するとともに、特別の教育課程を編成し取組を続けている英語科の学習に全職員がより積極的に取り組むことにより、自信をもって積極的にものごとにかかわる力や多面的で多様な考え方ができる力を育てることにつなげ、児童の自信や学ぶ意欲、ひいては学ぶ力の向上につなげていきたいと考えている。

学期末に行っている児童アンケートでは、「英語に興味があり、もっと英語を学習したいと思いませんか。」という問いに対して、令和5年の2学期末のアンケートでは、77.2%の児童が肯定的な回答をしている。授業の中で、基礎的な事項の繰り返しや友だちと交流する楽しい学習活動を重ねる中で、主体的に英語の学習に参加する姿がたくさん見られる。また、英語専科教員の発案により、朝の帯時間（Eトレの時間）に日常的に使える英語の表現をALTとの楽しい掛け合いの中で体験する活動にも取り組んでいる。このような活動を通して、全校児童の英語を日常的に使いたいという思いを育て、児童の英語に対する興味関心を高めることにつなげていきたいと思う。さらに、本校の英語学習において、ALTの存在も欠かせない。授業でのフレンドリーな対応だけでなく、休み時間にも児童と一緒に遊ぶことでつながりを深め、英語の時間に学習した表現を使いコミュニケーションをとる場面が、廊下や運動場でよく見られている。児童の学習意欲や満足感を大切に、さらに今後の英語教育の充実につなげていきたい。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

県の教育目標「未来を拓く心豊かでたくましい人づくり ～人生100年を見据えた『共に生きる』滋賀の教育～」、市の教育目標「ともに学び、ともに育つ、学びあいのまち まいばら ～自分もひとともに大切に、地域に誇る人づくり～」の中にある、これからの時代を生きる力の育成や人とのかわりの中で進んで自分を鍛えるという精神は、本校の教育を進める上でも基本としているところである。社会のグローバル化が進む中、英語への期待は一層高まっている。本校でも、英語教育の重要性を意識されている保護者の方は多く、塾などで英語を学んでいる子も少なくない。このようなことを踏まえながら、英語に親しみ、進んで英語学習に取り組もうとする児童を育てることを目

標に取組を進めている。

全国学力学習状況調査の質問項目「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」に対する肯定的回答率が高い傾向は継続して見られており、校内研究や英語学習で取り組んできた友だち同士の交流場面を大切にした学習の成果が現れていると考える。さらに、「英語の勉強は好きだ」という問いに対して肯定的な回答をする児童の割合は、県や全校平均と比べてかなり高く、英語の学習に楽しく取り組んでいることも喜ばしいことである。子どもたちが楽しく取り組める英語学習を今後も継続する中で、さらに広い視野で他者を理解したり、つながりを深めたりしたいという意欲を高めるような授業づくりに、今後も取り組んでいかなければならないと考えている。

4. 課題の改善のための取組の方向性

英語教育については、保護者にも「子どもは、英語に興味をもち、英語の学習を楽しみにしている」という設問を設定し、評価をいただいている。結果としては、前年度 78.3%であった肯定的回答が 66.3%に下がった。年度途中で担当 A L T が変わったこともやや影響していると思われるが、英語に関する情報提供をさらに積極的に行ったり、楽しい授業づくりに取り組んだりしていきたいと考えている。

また、英語科に対する保護者の期待は大きく、楽しいだけの取組から児童が興味をもち主体的に学びを深め、英語力の向上を図っていくことが今後求められると考える。特別の教育課程実施 5 年目を迎え、一定の成果は見られているが取組のマンネリ化も見られているように感じている。英語専科教員と A L T を核にしなが、全職員のアイデアも取り入れながら取組を進め、本校の特色ある取組として定着するよう努めていきたい。

具体的な取組としては、第一に、児童の意欲を高める授業づくりである。児童の発達段階に応じた、「やってみたい」「できた」「使ってみよう」と思える学習展開の工夫や教材の開発に、過去の取組の成果を生かしなが、さらに積極的に取り組み授業改善を図っていききたい。専科教員、A L T と担任による、つけたい力や評価の観点を明確にした指導計画の立案や、I C T 機器等を活用した分かりやすい授業づくりにより積極的取り組みすることで実現につなげていきたい。

二つ目は、評価の充実である。学習活動ごとの目標を明確にし、指導の中で児童の取組や進歩の状況を積極的に評価することで、目標に迫る児童の姿につなげていきたい。また、児童の発達段階に応じた具体的な姿を検証していくことで、学習評価の妥当性や信頼性を高め、保護者にも理解され協力いただけるような評価としていくことが必要である。

三つ目は、中学校の英語学習へつなげていくことである。生涯英語に親しむ日本人を育成するには、入門期の英語を指導する小学校教員も次の段階の英語教育について理解する必要がある。特に小学校では英語科の免許を持たない教員が指導することとなる。研修を通じて英語力の向上に努めることはもちろん、小中連携による授業参観や交流学習を進めていく必要があると考える。幸い、本校区では小中交流の仕組みがあり、そこを活用した英語科指導の交流を図っていききたい。